



立命館創始140年
学園創立110周年記念



立命館大学アート・リサーチセンター

新収蔵資料展

—友禅下絵と乾板写真から—

展覧会
日時

2010年

7月12日(月)～27日(火)

9:30～17:00 [入場無料・土日祝休室]

場所

立命館大学[衣笠キャンパス]

アート・リサーチセンター 1階・閲覧室

展示解説

第1回 7月15日(木) 17:30～18:00 ※当日のみ開室時間延長

第2回 7月23日(金) 16:30～17:00

主催

文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」
(立命館大学)／立命館大学アート・リサーチセンター

企画

京都文化研究班・木立研究室

協力

加藤 政洋(立命館大学文学部准教授)
松田有紀子(日本学術振興会特別研究員〈立命館大学大学院先端総合学術研究科〉)



立命館大学アート・リサーチセンター

新収蔵資料展

—友禪下絵と乾板写真から—

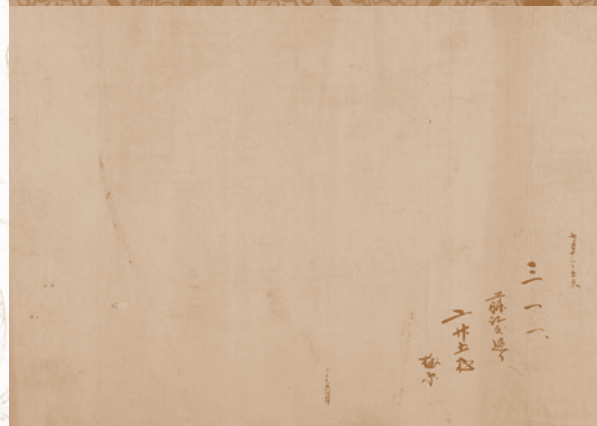
本展は、立命館大学アート・リサーチセンターが新しく収蔵した近代京都染織図案資料群（友禪下絵・絵摺）と島原太夫乾板写真資料群の紹介とデジタルアーカイブ化作業・調査の中間報告です。

京都あるいは京都文化といったときに思い起こすものは何でしょうか。人によってさまざまな景色やものがあると思いますが、今回は着物（西陣織・友禪染）と花街を事例としてとりあげました。両者はその質の高さや、長い「伝統」により、現在でも京都を代表する場所やモノであり、また主要な観光資源や重要な産業であるとも位置づけられています。一方で、明治維新後、花街は近代公娼制度のあらたな統制と管理のもとで、友禪染・西陣織をはじめとする染織業界は技術革新や我が国の経済発展を背景に、近世までのありかたから大きな転換を果たしています。現在私たちが見知っている両者の姿は、近代化のなかでの変化を経たものですが、こうした大きな変化があったことは、必ずしも一般に理解されたり知られたりしているとは限らないと言えます。

本展では、そうした近代にはいつての変化の部分と、近代におこったそれぞれのイメージの形成を、資料をもとに眺めていきます。定型化され、はがきや写真等さまざまな媒体に掲載されていく太夫の道中写真や、きまったモチーフが微妙なバリエーションの違いを入れつつ何度も作られる着物（染織）図案などは、くり返し生産され人々の目にさらされることで「伝統」となり、また「京都（京都文化）」らしさとして形成・認識されていったものであるといえます。こうした写真や図案というモノそのものの、あるいはモチーフ・図像にみられる引用とアレンジの様子を、資料というモノからとらえ、そこから形成されるイメージについて提示してみたいと考えています。



〔友禪図案〕上：表面 下：裏面



〔友禪絵摺り〕上：表面 下：裏面



〔島原太夫乾板写真資料群より〕

展示解説

〔第1回〕 7月15日(木)
17:30～18:00
※当日のみ開室時間延長

〔第2回〕 7月23日(金)
16:30～17:00



主催 文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」（立命館大学）
立命館大学アート・リサーチセンター
企画 京都文化研究班・木立研究室
問合せ先 立命館大学アート・リサーチセンター事務局 〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
TEL 075-465-8476（平日9時～17時30分） arc-jimu@arc.ritsume.ac.jp

